

土木学会

平成 13 年度 全国大会研究討論会

21 世紀のエンジニアに求められるキャリア

平成 13 年 10 月 2 日 熊本大学

主催：土木学会コンサルタント委員会

土木学会平成 13 年度全国大会研究討論会

『21 世紀のエンジニアに求められるキャリア』

主催：コンサルタント委員会

技術万能時代から評価尺度多様化の時代に向かう 21 世紀のエンジニアには、建設技術のみならず複合専門性を要するマネジメントの時代に対応できる資質が問われる。また、市民志向に立脚し、地球環境保全に配慮したサステナブルな創造価値を提供するためには、風土文化や感性への配慮と共にエンジニアとしての信念や哲学といった人間的側面までも問われてくる。これからは「あなたのキャリアは何ですか？」が問われるようになる。

討論会では、一味異なるキャリアの持ち主より話題提供をいただき、21 世紀のエンジニアに求められる資質と素養、キャリア形成には何が必要か、キャリアアップと継続教育等の活用について参加者と共に討論する。

1. 座長、話題提供者

座長：山田 孝治, 日本工営(株)大阪支店 支店長
話題提供者：松井 宗広, (財)砂防・地すべり技術センター 砂防部長
星野 裕司, 熊本大学工学部環境システム工学科 助手
谷口 陽治, 清水建設(株)九州支店 土木工事長

2. 開催日時・場所

日時：平成 13 年 10 月 2 日(火)16:20－18:20
場所：熊本大学黒髪キャンパス工学部 234 教室

3. 討論会進行予定

- －話題提供者による自己紹介および話題提供……各 10 分程度
- －会場を交えた研究討論審議
- －座長による総括

4. ご意見など

土木学会の Home Page にコンサルタント委員会 Home Page を開設しております。当委員会や、本日の研究討論会へのご意見をお願いします。

<http://www.jsce.or.jp/committee/kenc/index/html>

本日はご参加ありがとうございました。

～座長ならびに話題提供者の略歴～

座長(司会・進行)

山田 孝治

昭和 17 年 12 月生まれ (58 歳)

昭和 43 年 3 月 大阪市立大学大学院土木工学研究科卒業

職 歴

昭和 43 年 4 月 名古屋大学土木工学科助手

昭和 45 年 4 月 日本工営(株)入社 技術研究所

昭和 60 年 4 月 日本工営(株)第三土木技術部次長、技術研究所土質研究室室長

平成 2 年 4 月 日本工営(株)大阪支店技術部部長

平成 7 年 7 月 日本工営(株)コンサルタント技術本部本部室室長

平成 10 年 4 月 日本工営(株)東京事業部副事業部長

平成 11 年 4 月 日本工営(株)福岡支店支店長

平成 13 年 6 月 日本工営(株)大阪支店支店長、コンサルタント国内事業本部副本部長

現在に至る

資格 技術士(建設部門)、工学博士、1 級土木施工管理技士、VE リーダー、土木学会フェロー
会員

話題提供者

松井 宗広

昭和 23 年 11 月生まれ (52 歳)

昭和 47 年 3 月 愛媛大学農学部林学科卒業

職 歴

昭和 47 年 4 月 建設省近畿地方建設局六甲砂防工事事務所調査課

昭和 54 年 4 月 建設省近畿地方建設局大滝ダム工事事務所調査設計第二課長

昭和 61 年 4 月 建設省北陸地方建設局神通川水系砂防工事事務所長

昭和 63 年 3 月 インドネシア公共事業省(JAICA 長期派遣専門家)

平成 2 年 4 月 (財)河川情報センター副参事

平成 4 月 1 月 建設省河川局防災課災害査定官

平成 5 年 4 月 建設省九州地方建設局雲仙復興工事事務所長

平成 9 年 4 月 建設省河川局砂防部砂防課火山・土石流対策官

平成 11 年 4 月 建設省土木研究所砂防部長

平成 12 年 4 月 (財)砂防・地すべり技術センター 砂防部長

現在に至る

話題提供者

星野 裕司

昭和 46 年 4 月生まれ (30 歳)
平成 6 年 3 月 東京大学工学部土木工学科卒業
平成 8 年 3 月 東京大学大学院工学系研究科社会基盤工学専攻修了
職 歴
平成 8 年 4 月～11 年 3 月 (株)アプル総合計画事務所
【プロジェクト】
・国道 58 号歩道景観設計, 沖縄県那覇市、1997
・万代橋景観設計, 神奈川県横浜市、1999 など
平成 11 年 4 月 熊本大学工学部環境システム工学科 助手
【プロジェクト】
・九州縦貫自動車道加久藤トンネル坑門景観設計, 熊本県人吉市・宮崎県えびの市、
2000～
・東バイパス整備に関する意見交換会コーディネーター, 熊本県熊本市、2001 など
現在に至る
資格 1 級建築士

話題提供者

谷口 陽治

昭和 34 年 2 月生まれ (42 歳)
昭和 56 年 3 月 九州大学工学部土木工学科卒業
職 歴
昭和 56 年 4 月 清水建設株式会社入社
昭和 56 年 6 月 福岡都市高速石城高架建設工事
昭和 57 年 5 月 全農唐津石油基地建設工事
昭和 58 年 9 月 沖縄開発庁宮良川農業水利事業底原ダム建設工事
昭和 61 年10 月 九州農政局耳納山麓農業水利事業幹線水路田主丸 10-1 工区工事
昭和 62 年 5 月 北海道開発局美利河ダム建設工事
平成 元年 5 月 北海道開発局芽室農業水利事業美生ダム建設工事(主任技術者)
平成 2 年10 月 北海道開発局一般国道241号音更町共和橋下部工事(現場代理人)
平成 4 年 3 月 幕別町札内北第1污水幹線新設工事(2工区)
平成 4 年 5 月 アイシン精機(株)豊頃試験場建設工事
平成 5 年 1 月 北海道開発局芽室農業水利事業美生ダム建設工事(現場代理人)
平成 8 年 8 月 北海道支店土木部工事長(帯広地区担当)
平成 10 年 4 月 九州支店土木部工事長(小丸川ダム準備室)
平成 11 年 3 月 九州電力(株)小丸川発電所下部ダム土木本工事(第 5 工区)
(監理技術者、副所長)
現在に至る
資格 1 級土木施工管理技士、甲種火薬取扱保安責任者、採石業務管理者、コンクリート主任
技士、指定建設業監理技術者、小規模ダム工事総括管理技術者、ダム工事総括管理技
術者

21 世紀に求められる技術者像

(財)砂防・地すべり技術センター 砂防部長
松井 宗広

1 はじめに

21 世紀に求められる**キャリア**という言葉について違和感がある。(表題に用いなかった所以)

どのようなキャリアパスを持っていたとしても、それぞれの技術者が自身のキャリアパスを基礎として 21 世紀にフィットする技術者像に自らを近づけようとする自己啓発の姿勢が大切なように思う。たとえば、組織に属さないとしても、キャリアパスは自ら決められないことのほうが多い。21 世紀に技術者として求められるのはキャリアパス自体ではない。どのようなキャリアパスの中にも 21 世紀の技術者として必要なエッセンスがあるはずなのでは・・・。

時間と場所等に関わりなく必要とされる普遍的な側面、21 世紀になったからといって急に変わるものではない側面があるはずであり、そちらの方がむしろ大切な要素であるように思われる。

勿論、世の中は常に変化しており、必要とされるニーズは変わっていくに違いない。従って、21 世紀に求められる技術者というものを考える場合に、変わるものと変わらないものに分けて議論する必要がある様に思われる。

2 21 世紀の方向性

時間とともに変わっていくものの捉え方は人それぞれ異なるであろうが、大きく 2 つに分けると、地球を取り巻く種々の環境と人間の要求水準の変化が考えられる。21 世紀には何が変わるのか、それによって技術者に求められるものがどう変化していくのかという根本的な視点はそれぞれの技術者が常に意識しておく必要がある。技術者に求められるものの大枠、フレームという視点ともいえる。既に、承知されていることと思うがいくつか思いつくキーワードを掲げると、大枠では

情報化(IT) 高齢化 少子化 国際化 グローバル化

地球的規模の環境変化(温暖化等) 持続的発展性の重視等、

個人の意識レベルでは

価値観の多様化 物質的満足飽和→精神的満足の欲求 ボランティアへの関心等、

行政レベルでは

情報公開 透明性 競争性 公平性 ストックの活用 環境・都市重視

ハードからソフトへ(施設を造ることを中心としない施策)等、

この様に、キーワードを並べただけでも大変幅がある。この様な方向の総てに適合するようなキャリアパスを有する技術者はレアではないだろうか。

だからといって、萎縮する必要は全くない。これらのキーワードを意識し、その様な方向に自分を持っていこうという姿勢を持ち続けることが重要で、その様にしていれば何時しかその様になっていくし、自分の今までのキャリアパスからもその様な方向に沿ったものを探し出せばいろいろと出てくるのではないか。

ところが、この様なキーワードに示される一種の方向性もすぐ変わる可能性がある。

特に、日本人は価値観が比較的変わりやすい(良い意味で柔軟、悪い意味で軟弱)国民性だし、日本のように資源のない国はちょっとした外的要因の変化で、全体の方向性がすぐ変わってしまうことがあり得る。

3 技術者以前

変わらないものとはなんだろうか。時間と場所等に関わりなく必要とされるものとは・・。

このことを考える場合、当然のことであるが、技術者は人間であるという所からスタートする必要がある。技術者以前に、人間として必要なものとは何かということである。21 世紀であろうとなかろうと人が協力しあって良い社会を創るために必要なもの・・。それは技術者である以前に人間としての資質であると思われる。これについても、いくつか思いつくキーワードを掲げると、

誠実 礼儀 明朗 明晰 実行力 優しさ リーダシップ力 健康 先見性
鷹揚さ 社会性 迅速性 コミュニケーション力 専門性と総合力とのバランス
良識・常識 感性 品性 ひたむきさ など

これらをまとめて表現すると「性格力」又は、トータルな意味での人格ということで「人格力」と言えるかも知れない。技術者は往々にして専門性を深く追求するあまり、「性格力」または「人格力」に不足することがある。技術者は技術者以前にまず人間であり、そうである以上人格力を有することが大変重要だと思われる。技術者以外でもこれらのことは大変重要であると思うが、技術者の社会的評価を高める上で特に強調したい。

変わるものと、変わらないものではどちらが重要だろう？表題に関していえば両方であることは論を待たないが、個人的には「変わらないもの」にウエイトを置きたい。

4 望ましい技術者像

変わるものと変わらないものの論点を総合すると次のようなアビリティが必要なものとして浮かび上がってくるとと思われる。(3の論点は十分に満たされていると言う前提で)

- ・ 部分最適解ではなく総合的にグレードアップできる視点での発想力
- ・ 最終目的に導いていける具体的手段、表現力、技術力
- ・ ニーズの先取、予見性
- ・ T字型(幅の広さと同時に深さ)指向を常に目指していること
- ・ 現場状況(地元の特性、用地、施工、工期等)の理解力
- ・ アマチュアリズムの視点での発想力(プロ的発想との調和)

5 あとがき

21 世紀に求められるキャリアという言葉にかえてアビリティと置き換えるべきであると思う。キャリアパスという言葉は過去を引きずっている。温故知新の言葉どおり過去を振り返るのは大切だが、個人的には未来を見据えるほうが好きだし、誰しも未来に夢を馳せるほうが楽しいのではないか。それぞれの技術者がそのキャリアパスを通じて将来にフィットする、必要とされる技術者像を追求していくひたむきさが21 世紀の社会から求められるように思う。

偶然のはじまり、必然のおわり ～21 世紀のエンジニアに求められるキャリア～

熊本大学工学部環境システム工学科 助手
星野裕司

1. 私の立場

まず始めに、この研究討論会に参加する私の立場というものを明確にしておきたいと思う。私の参加資格として教育・地元・若手というキーワードが考えられる。教育を重視すれば、今後の土木界の展望を睨みながら、これからエンジニアになろうとしている卵たちに、どの様な指針を与え、どの様に送り出しているのかということが論点となるだろうし、地元を重視すれば、近年言われている「think globally, act locally」というコンセプトをどの様に実践しながら、キャリアを積んでいるのかが問われるだろう。しかしここでは、最後の若手ということに焦点を絞ってみたい。つまり、今現在、リアルタイムでキャリアを積み、あるいは積んでいこうとしている立場の人間の1つのケーススタディとして自分自身を捉え直すことで、研究討論会のテーマである「21 世紀のエンジニアに求められるキャリア」という問題に、1つの視点を提示したい。

2. ある若手のキャリアとして

① 中学～高校～大学

自分のキャリアを述べるにあたって、中高時代から語り始めることは奇異な印象を与えるかもしれない。しかし、父親が造園土木の施工会社を経営している関係で、長期休暇は現場へバイトに出ることが日課であった。この現場での経験を通じて設計への道を志したし、職人や出稼ぎの人々と共に働いた経験は、身体記憶として培われていると思う。そのような経緯から、当時、建築家を目指した私にとって、大学進学が必要とは考えられなかった(有利だろうとは思ったが)。逆説的であるが、その任意性が魅力となり、東京大学へと進学した。そこで、最終的には土木工学科へ進学し、景観工学に出会い、専攻することとなった。この時期に、自分のしたいことがおおよそ固まり、それに対してほぼ自由にアプローチすることができた。現在の考え方及び人間関係の基本は、この時期に形成されたと思う。

② 設計事務所～熊本大学(現在)

景観デザインを志したが、その才能があるかどうか、全く自信がなかった私は、行ける範囲で最も厳しそうなアプル総合計画事務所に就職した。数年やって、ダメならあきらめようという気持ちである。そもそも長く勤める気持ちがなかったため、とりあえず仕事を覚えることと1級建築士の資格を取ることを目標とした。その後、偶然にも熊本大学へ移る話が来たので、転職した。その理由は、大学の研究・教育に関心があったのはもちろんだが、地方に拠点を置いた仕事を、少なくとも若い時期に経験しておきたかったからである。また、地方にいと(この研究討論会に呼ばれたこともその一つだが)、自分の専門に捕らわれない活動をせざるを得ないということも非常に興味深い。現在、教育的には、通年の授業が今年から始まり、また、研究的には、学位取得に向けて準備中である。これら二つが、現在の明確な目標となっている。

③ これから

学位取得後のことである。とりあえずは留学という形を取るだろうが、海外に出ることを検討している。今後の建設業界自体もそうであろうが、研究や教育、あるいは個人のキャリアも国際的にならざるを

得ないだろう。そのためのステップを踏み出したいと考えているが、東京(日本の中心)を離れた意義は、海外に出ることによって、より明確になるのではないかと、また、情報発信をする力(筆者は、これからのキャリアを考える上で、重要な能力と考えている。後述)は、国際性を得てこそ、本来の能力となるのではないかと考えている。

3. キャリアを積むために必要だと考えていること

長期的な計画を持って、主体的にキャリアを積んでいくことは、今後、より一層重要性が増してくるだろう。ただ、その実践は容易ではないし、変に堅苦しい生活になっても窮屈であろう。また、欧米的に、キャリアを積むこと＝職場を変わることというイメージがあるかもしれないが、単に職場を変わるだけではフリーターと変わらない(もちろん、職場を変わることがもう少し自然に行われるようになるべきだと思われるが)。職場を変わる・変わらぬに関わらず、大切なことは以下の3点ではないかと私は考えている(図-1参照)。

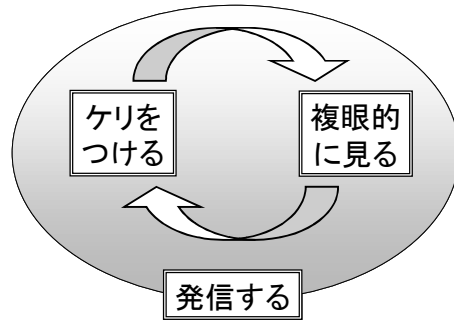


図-1 3つの要素

① ケリをつけること

明確な計画を持って活動するスパンは、そんなに長くなく、3～6年の数年単位でいいのではないかと考えている。ただ、そのスパン毎にきちんとケリをつけていくことが大切であるだろう。そのケリをつけるということが、他人に決められたルールに乗っているのではない主体性を確保してくれるのではないだろうか。私の場合、中・高の6年間に対しては大学受験が、大学の6年間に対しては修士論文が、設計事務所の3年間に対しては1級建築士取得が、そのようなケリとして働いているし、現在は、研究者見習いとしての自分にケリをつけるため、学位取得を目指している。

② 複眼的に見ること

ケリをつけた次に関しては、大まかなイメージさえ持っていればよいと思う。ただ、その次が、これまでの経験(キャリア)を相対化し、より広い複眼的な視点を準備できるものでなければならないのではないだろうか。スペシャリストかゼネラリストかという議論があるが、いまいちピンとこない。自分や自分の仕事をより大きな視点で(ゼネラルに)位置づけられなければ、スペシャルになり得ないし、何らかのスペシャルを持っていなければ器用貧乏の言葉通りに、主体的に自分のポジションを確保することはできないと思う。

③ 発信すること

熊本に来てから強く意識するようになったことであり、現在の自分の課題となっていることであるが、前2者を有効なものとする最もベースになる能力なのではないかと考えている。つまり、「ケリをつけること」の中には、社会に発信し認知される機構が含まれるし、一方、「複眼的に見る」ためには、常に広い世界の人々と情報交換していく必要があり、その場合、まず自分から発信しない限りは、身のある情報は入ってこないと考えて良い。近年、その必要性が叫ばれている生涯教育なども、まず「発信する場」として位置づけられる必要があるのではないだろうか。

4. 教育の現場から(熊大の試み)

熊本大学の環境システム工学科では、2000 年度の新入生から新カリキュラムに移行した。そこでは、従来の土質、水理、構造、etc という専門分野別の構成から、「コミュニケーション」「環境」「社会」「数学・計測」「力学」という5つの教育項目別の構成にカリキュラムが変更されている(図-2参照)。

ここで特筆すべきは、従来のカリキュラムでは補助的なものであった環境情報処理や社会基盤設計演習、インターンシップ等で構成される「コミュニケーション」という項目を最も重要なものとして位置づけ、その後、「環境」「社会」と続く点である。今回の論点に即せば、技術者としての常識的な能力を「数学・計測」「力学」としてまとめ、それらを「複眼的にみる」ために、「環境」「社会」を位置づけ、3つの要素のベースとなる能力である「発信すること」を「コミュニケーション」として最も上位に位置づけていると考えることができるだろう。これらの新カリキュラムは現在2年目であり、とりあえずの「ケリがつく」のはまだまだである。



図-2 熊本大学の教育理念

5. 最後に

このレジュメのタイトルを「偶然のはじまり、必然のおわり」とした。21 世紀だ、キャリアだ、なんと言っても、あまり気張る必要もないし、とりあえずは、日々の仕事をこなして行くしかないと思う。ただ、きっかけやはじまりは偶然でいいのだが、それをどの様に終わらせることができるか？さらに、次のイメージをいかに持ち続けることができるか？それら気持ちを主体的に持ち続けることが、会社を変えたりするより、大切なことではないかと考えたからである。

「21 世紀のエンジニア(土木技術者)に求められるキャリア」

清水建設(株)九州支店 土木工事長
谷口 陽治

1、はじめに

私は小学校・中学校時代の9年間を、北海道の大自然の中で過ごした。
遊びの舞台は広大な原野であり、よく小川で釣りをしたり、丸太橋やダムを造って遊んだ。
こういった遊びの中で、橋げたとしての丸太の強さ(構造力学?)、ダム築堤材としての土石の性質(土質力学?)、小川の水の流れ(水理学?)など、身を以って学んだ。
これが私の土木屋としての原点である。
好奇心旺盛なこの時期に、技術者としてのこのような「勘」を培うことができたことは、幸運であったと思うし、現在では仕事をする上での大切なバックボーンとなっている。
高校の運動会の時には、学校の裏山から竹を切り出し、級友と徹夜でやぐらを組み上げた経験により、「みんなで力を合わせ、ものを造り出すことへの喜び」を知った。
これらのことがきっかけで、土木系の大学に進学した。(とはいえ、その当時は確固たる動機はなく、今考えるとそうだったかなと思う程度のことである。)
大学を卒業後、すぐに建設会社に就職、「①理論より実践、②もの造りが好き」という自分の性格から、この選択に迷いはなかった。)今年4月でちょうど20年になった。
この間、北は北海道から南は沖縄石垣島まで、主にダム現場(4現場)を転々として来た。
いわゆる「現場一筋」である。
土木技術者と一口で言っても、職場は官公庁、学校、コンサルタント、メーカー、建設会社、自営業など様々であり、また、同じ職場でも計画、調査、設計、教育、研究、開発、技術、営業、現業など、様々な立場の技術者が存在するわけであるから、これらをひとくくりにして考えるより、あえてここでは、「ダムという典型的土木工事の現場にいる一土木技術者」という視点で、日頃考えていることを含め、論題について考えてみたい。

2、自分のキャリアについて

「キャリア(career)」という言葉の意味は「①(一生の仕事としての)職業、仕事。
②(特に公的な人の)経歴、生涯。」だそうである。
私のキャリアを一言でいえば、「ゼネコンのダム屋」というのが、最も適確で過不足のない表現であろう。
確かにダム施工についての知識や経験は、一般の土木屋よりも豊富であろうし、「ダム屋の中でも、俺の技術は結構捨てたもんじゃない。」というくらいの自負はある。
キャリアがかなり特殊な部類に属するため、監理技術者の経験者を重視した、現在の発注制度が変わらない限り、「ダム屋」の看板は容易に下ろせそうにない。
いまさら、「シールド屋」に転向する気もないし、やはり今後とも経験と実績のある「ダム屋」を続けることが自分のキャリアを活かすことになり、それが自分や会社のため、ひいては社会のために貢献することになるのは容易に想像できる。
仮に、私がある会社に再就職するとして、面接担当者に自分のキャリアをアピールするとすれば、何というだろうか？

「ダム現場という大きな工事現場の、品質管理から工程、原価、安全、労務管理および近隣対策まで一切を統括できます。また、実績も公的資格もあります。」とでも言うのだろうか？まあ、多少の「ふかし」は当然あるにしても、当たらずも遠からずであろう。

3、これからの技術者として大切なもの

20年間の現場第一線での経験を通して、「これからの土木技術者として大切なものを3つ上げよ。」と問われれば、あえて以下の3つを上げたい。

1) 意思伝達能力(コミュニケーション力)

人間同士の意思疎通は、個の時代、価値観多様化の時代といわれる今こそ、ますます重要となってくると思われる。自分が何を考え、どうしたいのか、また相手はどうなのかを、お互いよく理解し、調整する能力は不可欠と考える。

今までの土木屋は「縁の下の方持ち」を美学とし、自分の技術と業績に自己満足するだけで、この辺は非常に不得意とするところであった。

「以心伝心」は、ある意味で理想の姿かもしれないが、口を開かず、相手は理解してくれていると思っていたところ、実はそうでなかった。というのでは困るし、不幸だ。

「おかしい、なぜだ、と思ったらまず口を開け。」

2) 情報収集能力

現場業務は「問題解決作業」の連続である。しかも、解答期限は「即刻または至急」という事がほとんどである。個人の判断能力は、各々の知識と経験と哲学によるところが大きい。この中で、経験と哲学はその場ではどうにもならないにしろ、知識というのは確かな情報源をもつことで、決定的な個人差がでてくる。

近頃はインターネットで色々な情報がずいぶん手軽に検索できるが、本当に生きた情報は、情報を持っている人に直接聞くに限る。そういう人が何人いるかが、個人の貴重な財産になる。

私自身、よく考えてみると、現場で困った時に気兼ねなく電話できる相手というのは、必ずと言っていいくらい、同じ釜の飯を食った昔の同僚か、どこかの居酒屋で一杯やって意気投合した連中である。古い人間といわれようが「酒は飲むべし。」(ちょっと安易かな?)

3) 三現主義

私の大好きな言葉である。ただし、好きな言葉だからといって、十分実践しているかと問われると言葉に詰まる。

現場技術者である限り、できるだけ現場に張り付き、状況を常に把握しながら問題点を探し出し、見つけてはこれに手を打つ。生産現場でよりよいものを造ろうとすれば、これが基本であり、理想である。

はたして、現実には「管理」の名のもとに、書類、書類の山である。書類の山が高ければ高いほど、立派な現場管理をしているかのようだ。

何がおかしいのか？みんなが疑問に思うこの問題の本質を、じっくり議論すべきである。

「みんな現場に出よう。現場に出れば何か必ず見えてくる。」

4、おわりに

1年先のことさえ予測が難しい今日にあって、21世紀という、この先100年にもわたる時代の変化を予測することは不可能に近い。

つい最近でさえ、あの「バブル時代」の到来と崩壊を一体誰が予想しただろうか？

結論から言えば、21世紀になっても「土木技術者のあるべき姿」は、今までと基本的には変わらないと私は信じる。

しかし、あくまで「あるべき姿」と「現実の姿」にはギャップがあるわけであり、このギャップを埋める不断の努力は当然必要である。

むしろ、土木技術者を取り巻く様々な現行システムは「あるべき姿」から、かなりかけ離れており、抜本的な改革を避けては、21世紀の土木技術者の明日はないと思う。

あえて言えば、これからの土木技術者に必要とされるものは、時代がどのように変わっていこうとも、フレキシブルに順応していく力ではないだろうか。

そのためには「時代の流れ」を読み取る鋭い感性と洞察力、先見性を持ち合わせることが大切である。

土木技術者としての「あるべき不変の姿」を忘れず、技術の研鑽、人格陶冶を怠らなければ、つまり「基本(人間)」がしっかりしていれば、どんな時代の変化にも十分対応できると思うのである。

Memo

ご案内 次回シンポジウム

第 16 回 コンサルタントシンポジウム「メンテナンスの時代」

20 世紀の後半、わが国は戦後の復興と経済の高度成長の時代を経験し、社会資本整備を急速に進めてきました。そして、21 世紀を迎えたいま、少子高齢社会は現実のものとなってきています。そのようななか、ストックの増加と社会基盤施設の老朽化のはじまりにより、維持管理や更新にかかる費用は増大し、低成長社会の出現とあいまって、維持管理・更新を重視した新しい時代の社会資本整備のあり方が問われるようになってきています。まさにメンテナンスの時代の到来といえましょう。

国土の改造から国土の保全へ、施設の建設から施設の運営・維持管理へと公共投資比重が移行していくなか、コンサルタントにおいても、いままでのように「建設産業」の専門家としての立場に安住するのではなく、社会資本の保全・運営ソリューションを提供する「サービス産業」の専門家へと意識の変革をはかっていくことが求められています。また、昨今の構造改革論議のなかで、重要なキーワードとなっている「都市の再生」「IT」「環境」は、いずれも維持管理と強いつながりを持つものです。

今回のシンポジウムは、維持管理・更新に関わる個々の手法や技術を議論するのではなく、多方面からの講師をお招きしてご講演をいただき、様々な分野におけるメンテナンスの概念(取り組むべき課題とその実行方法)を幅広く学ぶことで、土木分野での維持管理の方向性とコンサルタントの果たすべき役割を探ることを目的として企画いたしました。

多数のご参加をお待ちしております。

記

主 催	土木学会(担当:コンサルタント委員会)
日 時	2001年11月14日[水] 13:00-16:30
場 所	中央大学駿河台記念館3階370号室 千代田区神田駿河台 3-11-5(JR 中央線「御茶ノ水駅」下車、聖橋口より徒歩3分)
参 加 費	3,000円(テキスト代含む)
申込方法	土木学会誌 10 月号に掲載.
申込締切日	2001年11月1日[木]
内容問合先	土木学会コンサルタント委員会(土木学会研究事業課 工藤修裕) TEL: 03-3355-3559 FAX: 03-5379-0125 E-mail: kudo@jsce.or.jp

プログラム (講演者・時間帯などは都合により変更になる場合がございます。最新情報は土木学会コンサルタント委員会 Home Page でお知らせいたします)

13:00-13:05	開会挨拶	石井弓夫 委員長
13:05-14:35	講演	
	講演1: 電力流通土木構造物におけるメンテナンスの課題と方向性	山崎 剛 東京電力(株)工務部管路技術担当課長
	講演2: 都市インフラの維持向上を目指す東京都の下水道再構築	古市哲也 東京都下水道局計画調整部計画課基本計画主査
14:35-14:55	休憩	
14:55-16:25	講演	
	講演3: 都市のリノベーション(仮題) 中村正二郎(株)三菱地所設計土木計画部長	
	講演4: ヨーロッパにおけるアットマゼメント 中村裕司 ((株)アイ・エス・エス)第7小委員会委員長	
16:25-16:30	閉会挨拶	大野博久 幹事長